

著名なデザイナーとの出会いに 触発された青春時代

吉岡さんは1967年、佐賀県で生まれました。アートの世界に興味を持ったのは小学生のころ。レオナルド・ダビンチとの出会いがきっかけでした。

「科学と美術が融合した作品や発明品を見て、驚きました。僕も自分の発見したことを形にして人を驚かせたりするのが好きだったので、興味を持ちました」。

アートの世界に心惹かれた吉岡少年に、デザイナーという職業があることを教えてくれたのは、お父さま。車であれ、ドアノブであれ、どんなモノを作る工程にもデザインがあり、それを考える職業があることを知った吉岡少年は、「いつか自分もそんな職業に就いてみたい」と思い始めたといいます。

その後、高校進学の際は迷わず、当時、九州で唯一デザイン科のあつた有田工業高

桑沢デザイン研究所を卒業後は、インテ

リアデザイナーとして第一線で活躍している倉俣史朗氏に師事。その後、倉俣氏と親交のある三宅一生氏の下で、空間やパリコレクションのアクセサリーの

デザインを担当します。

吉岡徳仁さん

デザイナー・アーティスト

ニューヨーク近代美術館やポンピドゥー・センターなど、世界の名だたる美術館に作品が永久所蔵され、国際的な賞を多数受賞しているデザイナー、吉岡徳仁さん。東京2020オリンピック・パラリンピックでは聖火リレートーチのデザインを手がけています。革新的な造形美にあふれ、驚きと感動を与えてくれる作品はどういうふうに生まれてきたのでしょうか。作品誕生や人生観について、語っていただきました。

三宅氏の下での仕事で、特に印象的だったのが1992年のパリコレクション。吉岡さんはショーウィンドウで使う帽子や時計などを担当していたのですが、このとき「ファニーで使う帽子、何か面白いものないかな」と言われ、「透明な帽子がいい」と直感。透明度の高いシリコンを取り寄せて帽子を作り、世界中をあつと驚かせました。

「あの帽子は、今でも一番記憶に残る作品です。でも、実は、見た目よりもずっと重

02 インタビュー

06 教えて！ 知るほどと
知っておきたい！
マイナンバーカード

10 金融庁主催オンラインシンポジウム
「金融経済教育と資産形成の未来～新型コロナウイルスの影響を踏まえて～」に日本銀行・若田部副総裁が参加！

11 マンガ「わたしはダマサレナイ!!」
新型コロナウイルス感染症に便乗した詐欺＆悪質商法の事例集

16 連載・エッセイ⑥
野菜と暮らす春夏秋冬—秋野菜
榎原道子
野菜料理家・フードコーディネーター

19 「知るほどと」からのお知らせ
『先生のための金融教育セミナー』
オンライン開催のご案内

20 そこが知りたいくらしの金融知識
定年退職前後に
押さえておくべき手続き

25 まなびや訪問
島根県出雲市立多伎中学校

26 特別企画
学びのありかたが大きく変わる！
金融教育の現場から考える
オンライン授業の利点と課題

30 おたよりコーナー
漢字矢印パズル

31 都道府県金融広報委員会一覧
編集後記

未来への希望を映し出すようなものを
表現したい



パリ・オルセー美術館にも
展示されているガラスのベンチ
Water Block (2002)

量がありましたから、当時のモデルさんも大変だったのではないでしようか（苦笑）。

世界が認めた

フリーに転身したのは29歳のとき。

「もともと専門だった空間やアロタクトのデザインに専心しようと思つての独立でしたが、当時はまだ、工業デザイナーという存在が認知されておらず、デザイナーを使いう企業も少なかつた。だからまず、自分のアイデアを作品として発表するところから始めました。自分にしか作れないものを作り、世界がどう反応するかを見てみたいと思いました」。

最初の作品に選んだのは「椅子」でした。椅子にはデザイナーの個性や思想が明確に表れるといわれ、実際、多くの著名なデザイナーが作品を世に送り出しています。世界に類を見ない新しい発想が求められるなか、吉岡さんが出した答えが『紙の椅子』でした。

「表面的なことだけを変えても革新的なものはできません。大事なのは構造からデザインすること。そこで浮かんだアイデアがハニカム構造の椅子でした」。

衝撃吸収性が高く、強度に優れています。

ハニカム構造の紙の椅子 Honey-pop (2001)



VENUS – 結晶の椅子 (2008)

『Honey-pop』は、わずか1cmの薄さに積層された120枚の薄紙を広げるごとによつて立体となり、人が座ることで椅子のフォルムになります。繊細さと強靭さを併せ持つ、まさに誰も考えつかなかつた斬新な作品でした。2001年に発表されると、世界は驚きと称賛をもつて迎え入れました。デザイナー吉岡徳仁が世に出た瞬間でした。『Honey-pop』は、その後、美術館や博物館で永久所蔵品に選定され、今多くの人に感動を与えてています。

思いはそれほどなくて。それよりも重要なのは、作りたいものを作れるようにならうことでした。生活はなんとかなるだろうと（笑）。アーティストとして、何を社会に対して提示していくか、ということが僕にとっては何より大事だったのです。

人生の中のものは、
すべて“借りているもの”
それより素晴らしいことがある

「光とデザインの融合」という壮大なテーマで、世界の注目を集めた吉岡さんは、さらに

以後、自然との融合をめざした作品が次々に誕生。2008年の結晶の椅子『VENUS』、2011年の『ガラスの茶室・光庵』などが誕生しました。中でも大変だったのは『VENUS』でした。

「ハニカム構造もそうですが、自然界に存在する構造に興味があり、結晶はぜひ挑戦したい素材でした。巨大な水槽に特別な成分の入った溶液と繊維の塊を入れると、そこに結晶が成長していきます。事務所の駐車場で1ヶ月かけて制作したのですが、知らない人が見たら、ちょっと怪しい集団ですよ（笑）。結晶は自然の産物ですからコントロールができません。だからこそ人間の想像を超えた美しさが生まれ、発見が

はつぶれることで価値を失いますが、僕は
そのグシャツとなつた姿が、逆にきれいだ
なと思つたんです。そうやつて、既成概念
を取り払い、誕生したのが、ハニカム構造
を持つ椅子『Honey-pop』です。

こうして、自らの方向性が見えてきた吉岡さんでしたが、まだ将来がどうなるかは不透明な状態。しかし不安はそれほど感じなかつたといいます。

「もともと、ガラスやシリコンなど、透明なものに興味があつたのですが、それは光を表現するうえで重要な素材だからです。僕が表現したいのは光そのもので、どうすれば形のない光を表現できるのか、ずっと考えていました」。

ある。大変だけど楽しい作業でした』。

こうして、次々と発表される斬新で美しい作品群。そのアイデアはどんなふうに生まれてくるのでしょうか。

『食事をするように、呼吸をするように、常に無意識にデザインのことを考えています。朝起きて、コーヒーを飲みながら、あるいはテレビを見ながら、ふつとアイデアを思いつく。頭の中で8割がたイメージができたら、初めて机に向かって具体的な形にするための作業をします』。

作品を形にするためには、費用のことも同時に考えます。その方法は、三宅一生氏の下で働いていたときに学んだといいます。

『当時、一生さんのところでは、たくさんプロジェクトの空間デザインを、僕一人で担当していたので、成功させるためには、スケジュールや予算を考えながらデザインをきちんと形にしなくてはならなかつたのです。幸い、費用のことであまり苦労をしませんが、費用をかけてでも

価値あるものを作る、という考え方が自然と身に付きました』。

オンとオフの切り替えは特にしないという吉岡さんですが、ときには車に乗り、ふらりと近場のキャンプ場へ出かけるそう。一人でテントを張り、自分を見つめる時間は、貴重なオフタイムだといいます。

『ただし、あまり道具には凝らないです。最低限の物があれば事足りるといいますか。物やお金に執着がないんです。よく思っているものは、すべて『借り買つたもの』だということ。たとえ自分で買ったものでも、それは、いつかはなくなり集めたりもしません。それよりもっと素晴らしいことが、自分の中にはあるので、それを形にすることが僕にとっては重要なことです』。

閉塞感を払拭するような新しい作品も始動

人生100年といわれる中、ちょうど折り返し地点を過ぎた吉岡さんですが、最近は、社会に対して、今、自分ができることをしたいという思いが強くなっているといいます。その気持ちの表れの一つが、今年の春に手がけたフェイスシールドのテンプレート製作でした。

『新型コロナウイルスの感染拡大により、緊急事態宣言が出ていたころ、友人の医師から医療現場の様子を聞き、飛沫感染防止のためのフェイスシールドが不足していることが分かりました。緊急を要しているも

のですから、

誰もがすぐ

に作つて使

えるよう

と、テンプ

レートを考
え、ホーム
ページに公
開しました。クリアファイルなどを使え
簡単に作ることができます。たくさんの方
からメールを頂くなど予想以上の反響があ
り、うれしかったですね。これからも、自
分にできることで社会に貢献できればと思
っています』。



フェイスシールド Easy-to-make FACE SHIELD (2020)

社会に対しても何を提示していけるか、ということが何より大事だった

そして、コロナ禍の閉塞感を払拭するよ
うな、吉岡さんならではの新作についても、
すでに構想はできあがつているといいます。
『3Dの試作はできていて、原理的には作
れることは分かっています。ただ、お金も
かかるので、さあ、どうしようかなという
段階です（笑）。世の中の雰囲気を変え、
未来への希望を映し出すようなものが今、
必要だと思うので、ぜひ、形にしたい。樂
しみにして待っていていただければうれし
いですね』。

プロフィール

吉岡徳仁 よしおか・とくじん

1967年生まれ。倉俣史朗、三宅一生の下でデザインを学び、2000年に吉岡徳仁デザイン事務所を設立。デザイン、建築、現代美術の領域において活動。代表作に、ガラスのベンチ『Water Block』、結晶の椅子『VENUS』など多数。東京2020オリンピック・パラリンピックでは聖火リレーテーマのデザインを手がける。芸術選奨文部科学大臣賞新人賞、Design Miami/Designer of the Yearなど国際的な賞を多数受賞。2007年にはアメリカNewsweek誌による「世界が尊敬する日本人100人」に選出。